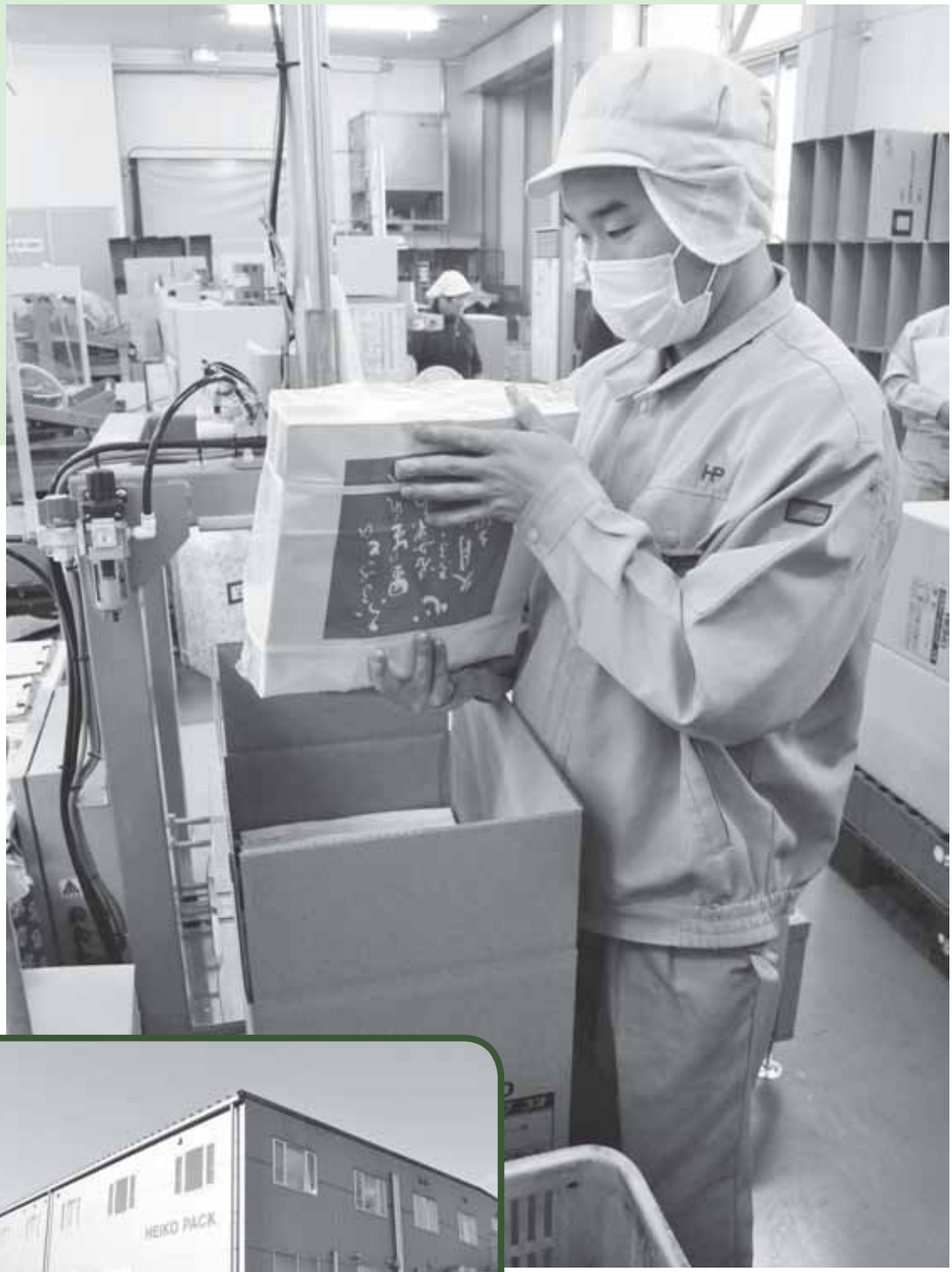
障害者の3分の2は正社員
～障害者は大切な働き手～

職場ルポ

―ヘイコーパック株式会社（栃木県）―



（文）清原れい子　（写真）小山博孝

取材先データ

ヘイコーパック株式会社（栃木県）

〒321-3304　栃木県芳賀郡芳賀町祖母井1702-1
TEL 028-677-0214　FAX 028-677-3628

Keyword：製造業、特別支援学校、助成金制度、職場環境の整備、職場実習

POINT

① １人の社会人として受け止め、「きちんとした距離感」を大切に接する

② 入社後は障害者サポートリーダーが目配りし、先輩が後輩を教える

③ 障害のある社員の３分の１がグループホームで生活。支援者、保護者とも協力

鈴木健夫代表取締役社長

包装用品「シモジマ」の生産工場として

栃木県の宇都宮駅から東に約15㎞。田園地帯に開けた数カ所の工業団地を通り過ぎると、包装用品の総合商社「株式会社シモジマ」の紙製品部門の製造を請け負う「ヘイコーパック株式会社」がある。従業員162人の約4分の1、39人の障害者が働き、紙袋などをつくっている。

輪転機がまわり、高速で紙袋が印刷されていく。大型機械からビニール袋でパッキングされた紙袋が次々と出てくる。シモジマグループ最大という工場の生産風景は、壮観だ。食品関係のパン袋なども製造しているため、衛生管理は徹底。ISO14001と9001を取得し、食品工場並みの環境を保つ。

障害のある人たちは、機械のオペレーター、その補助作業、梱包、検品などで大勢働いているが、みんなてきぱきと作業している。

ヘイコーパックの前身、「鈴木ビニール工業所」は、鈴木健夫代表取締役社長の父、鈴木恒男さんが1965（昭和40）年に創業した。おりしも時代は高度成長期、肥料販売の副業として包装資材関係の仕事を始め、シモジマとの取引を開始した。

「シモジマ足立工場閉鎖にともない、その設備の一部と従業員を含めて合併、1980年にヘイコーパックを設立しました。いろいろな時代を経て現在がありますが、紙袋、具体的にはショッピングバッグを製造しています。小さなものはフライドポテトを入れる袋から、大きなものはコートなどをお買い求めになったときの手提げ袋があります」

一口に紙袋といっても、大きさもデザインもさまざま。デパートや小売店の買い物などで、私たちは知らぬうちにヘイコーパックが製造した紙袋を受け取っているかもしれない。忙しいのは、年末商戦の時期だそうだ。

「10月ぐらいから徐々に仕込みに入ります。昔は各商店さんが11月後半から紙袋を準備されましたが、いまはギリギリになって必要な分だけになっていますから、12月中旬ごろに一気に出荷されます」

障害者のがんばりが社員の理解へ

鈴木社長は会社が設立される1年前の1979年に入社し、1996（平成8）年に社長に就任した。障害者を雇用するきっかけは、業界の仕事内容が適していたからだという。

「紙袋は、いまでこそ機械でできますが、設立当時は手作業が主流でしたので、障害者が何人か働いていました。会社が30～40人規模のころから、まわりの中学校の養護学級の卒業生などが毎年1～2人入社していましたが、お互いが手探り状態でした。本人も親御さんも一生懸命に頑張りすぎる一方で、会社のなかには『どうしてあの人たちと働くの?』という声もありました。給料をもらったら出勤しなくなったなど、ご本人に課題があるケースもありましたが、会社がフォローするシステムもできていませんでした。いま思うと、一生懸命やっていたのですが、空回りをしていたのだと思います」

ほどなくして、時代はバブルに向かった。昭和60年代に入ると近くに数カ所の工業団地ができ、自動車、精密機器、電気などの大手企業の工場が操業を始めた。

「内陸型の工場団地群としては有数の地域になりました。特に会社から一番近い芳賀工業団地ができてからは募集をしても入社を希望する方がいなくて、退職者も増えました。何とかしなくてはと考えていたときに、『イエローハット』の社長の、『社員の心を穏やかにするには職場をきれいにすることが大事』とトイレと社内の掃

さまざまな紙袋がつくられる
ヘイコーパックの工場内

除をして、次に近隣そして取引先のトイレの掃除をさせていただくという経営哲学に触れ、当社もそれを見習って掃除を始めると、少しずつ社風が変わっていきました」

社長自ら掃除に取り組み、近くの社会福祉法人「こぶしの会」が運営する「けやき作業所」のトイレ掃除も申し出た。

「作業所とは一緒にバザーも開いたりしました。そのうちに、その法人がグループホームをつくることになり、2001年に完成。そこに入居する4人をシモジマの社員として雇用することになり、二次加工のセクションをつくり仕事を出しました。障害者雇用を意識し始めたのは、そのころでした」

4人は、時間はかかったが一人前に仕事ができるようになった。

「最初は、パートさん1人分の仕事を午前2人、午後2人で分かれてやってもらいました。一番重い障害の人がパートの人と同じように仕事ができるようになったのを目の当たりにして、まわりの人たちの意識が変わり始めました」

2004年以降、辞める人はいなくなってきた。

「日々仕事をしているなかで、社員に理解が広まってきました。障害者雇用が安定してきて10年以上。いまは、障害のある人もない人もみんな一緒に働いています」

正社員で雇用 新工場も完成

20人ほどで推移していた障害者数が、一気に増えたのは2012年のことだった。本社工場と道路を挟んだ隣町の市貝町に大きな資材倉庫を備えた新工場を新設した。

工場が手狭になり、第2工場をつくろうと用地を買収、計画に入ったところで、「重度障害者多数雇用事業所施設設置等助成金」があることを、鈴木社長は知った。その助成金を利用するにあたり、新たに16人を採用した。しかし、いざ着工のときに東日本大震災が起こり、震度6強の揺れに襲われて、工事は延期。完成までに3年半かかった。

「当初は大きな工場を建てることは予定していなかったのですが、助成金をいただけるなら後世に通用する工場を建てようと考えましたので、予算は10倍ぐらいになりました。『1人でも多くの障害者を採用する企業が増えていくように地域にアピールしなさい、助成金はそのための投資だ』といわれたのですが、何社か障害者を採用してくださる企業が周囲にあるのはうれしいことです」

2012年には優良勤労障害者として、水沼幹行さんが当機構理事長賞努力賞を、黒﨑義仁さんと五月女靖子さんが栃木県知事賞を受賞した。

現在、従業員は162人（役員5人、正社員118人、パート社員39人）。障害者は39人（精神障害1人、身体障害7人、知的障害31人）で、3分の2は正社員だ。残り3分の1は、通勤の関係でフルタイムがむずかしいなど自己都合でパートを選択している。定年は60歳。再雇用は65歳だが、さらに働き続ける人もいる。採用は、取締役総務部長の川出厚さんが担当する。

「本人は、正社員かパートかを意識しない人が多いのですが、ご家族は就職のときに将来の安心を考える、とお聞きしますね。ほぼ毎年、地元の益子特別支援学校の卒業生が入社していますが、挨拶や自分の身の回りの用意、後片づけなどが備わっているお子さんが多いです。うちで働きたいという方に3～4回の職場実習を行って採用していますので、社員も顔なじみになっています。実習中に成長度合いを見ることができますし、ご家庭の協力が得られるかどうかもお聞きしています。入社すると、先輩が後輩に教えています」

「いい関係」を保ち、サポート

川出さんは、採用後も成長を見守っている。

「彼らは日に日に成長していますので、1人の社会人として受け止めながら、対応しているつもりです。それぞれにいろい

川出厚総務部長

総務課の小野寺恵美子障害者サポートリーダー

完成した紙袋の箱詰め作業を担当する
水沼勇平さん

ろな問題を抱えていますが、あまり踏み込んでもいけないし、逆にあまりプライベートなことは会社では対応できないので、その辺を注意しています。きちんとした距離感を大切にして、いい関係が保てるようにしたいですね」

総務課の小野寺恵美子さんは、市貝工場ができた2012年に就労支援側から転職した。工場2階で総務の仕事をしながら、障害者サポートリーダーとして現場に目配りしている。

「日々、いろいろなことはありますが、人間関係でトラブルが起きたとき、『自分がされたらどうなのか』を話すようにしています。嫌な言葉を投げかけたら、『自分がいわれたらどうなの?』と、常に自分に置き換えてもらうように努めています。最初のころは段取りなどを指示していましたが、いまはリーダーを決めて作業を進めています。それぞれの持っている力を発揮できているのではないかと思います」

「優しいお姉さん」という印象を受けるが、現場では「怖い」といわれるとか。

「私の姿を見ると逃げていく人もいますよ（笑）。何か問題があるときはあきらかに表情が違うのでわかるのですが、困ったときは自分から相談できるようになってほしいです。支援者の方もいらっしゃいますが、できることは社内で解決していきたいと思っています」

社員の通勤は最寄りの真岡（もおか）線・多田羅（たたら）駅から自転車か、あるいは送迎バスで。宇都宮から自転車で通う人もいる。約3分の1の人は近隣のグループホームで生活している。社内で解決が困難なことがあると、小野寺さんが支援者たちに連絡をとる。

「グループホームの世話人さん方はとても熱心ですので、本人の理解が不十分な場合は、保護者の方や世話人さんにお手紙を出しています。年1回、家族見学会を行いますが、その日は世話人さんも保護者の方と一緒に会社で半日過ごしています」

「世話人さんと保護者の方は、良好な関係だと思います。ここ10年ぐらいは生活支援が充実してきました」と川出さん。会社の行事は、家族見学会をはじめ、秋祭り、「道の駅茂木（もてぎ）」まで往復26㎞のウォーキング大会、親睦会の日帰り旅行とたくさんある。

1人の社員として仕事中

本社工場と市貝工場を案内していただく。工場外の窓から、水沼幹行さんが働いている様子が見える。作業に無駄がなく、流れるような動きだ。

ほこり防止の上着と帽子を身につけて手を消毒、エアシャワーを浴びて、工場のなかに入る。異物混入を防ぐため、従業員は食品工場で着用するユニフォーム姿で仕事をしている。床は掃除が行き届き、ピカピカだ。「薄緑色より濃紺色のほうが、ユニフォームについたゴミや埃が目立つので、より厳密な基準なのです。印刷工程は濃紺色を着用し、髪の毛が入らないように帽子も首まで覆（おお）っています」と川出さんが教えくれる。

水沼幹行さんの弟、勇平さん（24歳）は箱詰めの作業をしていた。

「両親の希望もあり、ここに勤めさせて

検品作業をする新入社員の滝田実生さん

定年後も再雇用で活躍する床井悦子さん

二次加工室のリーダーとして活躍する
石川真紀さん。
入社して13年目になる

もらっています。勤めて5年が経ちました。ビニールの口が開いていないか、穴が開いていないか、紙の汚れやほこりが入っていないかも見て、箱に詰めています。たいへんですが、楽しんでいます」。2016年全国障害者スポーツ大会いわて大会（いわて国体）の陸上100メートル競走と立ち幅跳びで入賞。「自己ベストは出せたと思います」。これからの夢は「家族を養っていきたいと思います。これからも働き続けます」

滝田実生さんは2016年に入社。職場実習のとき器用さを認められ、最初から検品作業に抜擢された。

二次加工室では、10人ほどが小ロットの紙袋の袋詰めや、色とりどりの緩衝材の袋詰め、「紙袋の取っ手を通常より長く」などの規格外の少量の注文を手作業で行っている。リーダーの石川真紀さんが説明してくれる。「底ボール（紙袋の底敷に厚紙を入れる）の仕事や、お客さまの細かいご希望に沿って紙袋の取っ手をつけています。ズレるとうまく持てませんから、つけるときは幅と斜めにズレないように気をつけています」

近くで作業していた床井悦子さんは勤続20年以上。グループホームの開設時に雇用された4人のうちの1人で、2016年6月に60歳の定年を迎えたが、その後も再雇用で働く。

「仕事は好きです。折ること、入れること。袋をまとめてビニール袋に詰めています。ずっと働いていたいです」。休みの日は「買い物に行っています。お金はたくさん貯まっています」。話し方が穏やかで、やさしい。「作業所から就労して、仕事をしているなかで磨かれて、顔つきも穏やかになりました。最初はパートさん1人でする仕事を2人でしていたのですが、最終的には1人でできるようになりました」と鈴木社長も成長を喜ぶ。

1996年の障害者合同面接会で出会い、社長が「たいへんな頑張り屋さんです」という栗田真佐枝さんも勤続20年。身体が不自由だが、車で通勤。事務の仕事を続け、いまは工場生産にかかわる事務を担当する。

「20年続けられたのは、みなさんのおかげです。仕事は、その都度教えてもらいました。大切にしていることは、なかなかむずかしいのですが、集中力を保つことです」

当たり前の社会で存在できる企業に

ヘイコーパックの経営理念は、西郷隆盛の「敬天愛人」。本社入口に石碑がある。社訓も西郷隆盛の遺訓で、月2回の全体朝礼で唱和する。行動指針「日本一の下請け工場目指して」と「安全十訓」は毎日の部門朝礼で。水・金曜日の部門朝礼では、「癒しの詩人」といわれる坂村真民らの詩を読む。朝礼のリーダーは、全員が輪番

紙パッキンづくりをする中三川和也さん（左）と
塩澤優気さん（右）

印刷部門でオペレーターとして働く吉田昇さん

リサイクルのためプレス機を
操作する箱島一也さん

で務める。「漢字がわからない人は事前に聞きにきます」と小野寺さん。

鈴木社長は、障害者雇用に関しては川出部長と小野寺さんに任せていると話す。

「2人がよくやってくれています。私は特別待遇はしていないという感じで、いまは任せていますよ。障害者と一緒に働くことで、社風がどんどんよくなってきたのが一番ありがたいと思います」

ただ、ちょっと気がかりなことがあるそうだ。

「障害者の雇用では、私たちのほうが勉強させてもらっていますが、障害者の人たちに仕事の慣れが出てきて、いま一度気を引き締めなければという時期にあると思います。また、家族的な社風ですから、遠慮なく話をしているつもりが、『きつくいわれた』と勘違いされて、とらえ方の違いで〝虐待〟と受け止められてしまうのではないか、という心配があります。今後、その辺はむずかしいですね」

経営者として、会社の将来を見つめる。

「会社としては製品コストをいかに削減していくか。より効率のいい生産体制をつくらなければいけないのですが、それだけでは企業としての存在意義がないという気がします。効率優先だけを考えると、健常者の人たちも社会的弱者になってしまうかもしれません。うちでは障害者も70歳以上の人も働いていますが、当たり前の、いわゆる『普通』の社会のなかで存在していける会社でありたいですね。社会的な使命がありますから、絶対潰すことはできません。障害者雇用の見本になるような、社風も誇れるような会社になっていきたいと思います」

ヘイコーパックの工場では、障害のある人たちも1人の社員として、「当たり前」に働いていた。

事務室では、宮田麻友美さん（左）と栗田真佐枝さん（右）が活躍中だ

工場に併設されたショップに並ぶ、
さまざまな紙製商品

本社入口にある「敬天愛人」の石碑